

寄稿

## 「臓器提供推進活動 —新潟県の歩みと現況について—」

新潟県臓器移植推進財団 常務理事  
新潟大学大学院 腎泌尿器病態学分野  
齋藤 和英



臓器移植医療においては、善意に基づいた臓器提供が必要ですが、わが国では欧米諸国、近年ではアジア諸国と比べてもその数が少ないことが課題でした。新潟県では全国に先駆けて臓器移植推進財団が中心となって、1999（平成11）年から病院啓発事業を、2001（平成13）年からはドナーアクションプログラムを開始し、国民一体となって臓器提供の普及啓発事業に取り組んできました。

市民公開講座、学校への出前授業、ラジオ番組などによる一般県民への移植医療・臓器提供の普及啓発活動を行う一方、県内の病院における体制整備と人材の育成を行ってきました。体制整備としては、臓器提供マニュアルの作成や、倫理委員会、虐待対応委員会の設置など、臓器提供に迅速かつ適切に対応できる院内環境の整備など。そして人材の育成については、特に救急医療を担当する部門の医師、看護師等のスタッフを中心に、臓器移植や臓器提供に関する専門的知識やスキルを習得・実践するための院内勉強会の定期的な開催を支援してきました。中でも、新潟県行政の強力な支援を背景に、新潟県知事からの委嘱状で任命される「院内コーディネーター」

制度を発足させ、県内各病院に100余名を配置し、施設におけるリーダーシップを担っていただくとともに、年2回の「院内コーディネーター研修会」を開催し、病院の垣根を越えた、県全体としての臓器提供体制の充実と人材の育成に努めてきました。

これらの地道な活動が実を結び、新潟県では1995（平成7）年から2022（令和4）年8月末に至る27年の間に、脳死下41名、心停止下57名、計98名の方々から臓器のご提供をいただきました。2019（令和元）年には人口100万人あたりの臓器提供者数が4.5人と、国内で最多となりました。全国平均が1人にも満たないことを考えると、大変な数字であることがお分かりいただけると思います。最善の治療にも関わらずお亡くなりなる患者様、ご家族様の尊い意思を確実に抽出し、臓器提供で救われる患者様に命のバトンを引き継いでゆくための社会的なシステムのさらなる充実を、静かに、しかし着実に進めてまいりたいと思います。

皆様のより一層のご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

トピックス

## 令和4年度 臓器移植対策推進功労者に感謝状!

移植医療の普及啓発・治療向上への功績が認められ、厚生労働大臣から感謝状が授与されました。



新潟大学医歯学総合病院 眼科長  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
眼科学分野 教授  
福地 健郎 医師（写真中央）



医療法人  
立川メディカルセンター  
立川総合病院

この度、厚生労働大臣より感謝状をいただきましたこと、大変光栄に思います。眼科における臓器移植の代表は角膜移植です。角膜移植が初めて行われたのは1905（明治38）年で、移植医療の先駆けでもあります。新潟大学眼科において代々引き継がれてきた角膜チームは新潟県内における角膜移植の普及と維持に尽力してきました。今回の感謝状はその代表としていただいたものと思っております。最近では、iPS細胞由来の角膜上皮、内皮を角膜移植のマテリアルとして使用されることが現実的なレベルまで来ており、すでに治験レベルで良好な成績が報告されています。今後の新たな展開が期待されます。一方で、コロナ感染の影響を受け、アイバンクへの登録数が減少、角膜移植数が減少、対象患者の待機期間が延長との記事が報道されていました。

角膜移植についてもポストコロナに向けて新たな体制構築を目指して行く必要があるように思います。引き続き皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

この度は、臓器移植についての感謝状をいただき、誠にありがとうございました。当院で取り組んでいる臓器移植推進の功績が評価され、大変光栄な事と喜んでおります。

当院では1985（昭和60）年から2009（平成21）年までに生体腎移植41例、献腎移植9例の手術実績があります。また、退院後のフォローアップを腎移植外来で行う体制が整い、さらに、県内で唯一のHLAセンター（※）が設置され、腎臓移植希望者の臓器移植ネットワーク登録を行っています。

また一方で、臓器提供にも積極的に取り組んでいます。現在まで10例の臓器提供をしてきました。多職種で構成される院内コーディネーターは現在6名おり、県の臓器移植コーディネーターと密に情報交換を取ることが可能です。

これを励みに、今後も病院全体で、患者さんの臓器移植治療に貢献していきたいと思っております。

※ドナーとレシピエントの適合性を検査することができる施設